ニューオリンズへ

友人の多くが、アメリカで一番怖いところとしてあげたのがミシシッピ。

映画「ミシシッピ・バーニング」で、ク・クルス・クラン（KKK）と黒人迫害を相手にFBIが闘うという人種差別のテーマの代表みたいになってしまった州だが、貧困度も高く、夜は運転してはいけないよ、と何度も言われた。それで、地図を眺めている時は、ケンタッキーから、テネシー、アラバマ、ミシシッピ、と動いてミシシッピのジャクソンあたりで泊まろうと考えていたのだが、余り脅かす人が多いので、計画を変え、アラバマを南下し、海沿いでミシシッピ州を通過することにした。

アメリカのハイウェイは、縦横に走っているが、州を跨っている場合でも、走っている州がその部分の管轄権を持つ。だから、州間ハイウェイI－10とか、I－80（IはInterstate－州間道路のことだ）であっても、出口番号は、州によって変わる（どうも、西から1,　2,　3とつけているみたいだが決まりがあるのかどうか、判らない）から、この出口番号が急に変わると、州が変わったことが判る仕組みだ。道路の修理状況も施設も州で変わる。アラバマからミシシッピ経由でルイジアナに抜けた時は、このハイウェイI—10であった。

ところで、数多くの州のハイウェイを通った為に、各州のハイウェイサービス施設を比べる結果となった。言ってしまうと、女性用トイレのドアである。アメリカに一度でも来たことのある人ならご存知と思うが、トイレのドアの隙間が、日本では考えられないほど空いている。これは、ドアの下側が空いているのと、ドアとドアを挟む壁つまりタテにドアに隙間がある、の二つで、これが広く空いていると外にいる人に常に監視されながら用を足すことになり甚だ不安定な気分になる。事情に詳しい人に言わせると、隙間があるのは、気分が悪くなった場合とか中に二人以上入っている場合（！）はすぐに外からでも判る、という安全と医療上の目的で隙間があるのだそうだ。とはいえ、この隙間が州によってはハンパではない。２センチ位の隙間がある場合、外側からは内部がシッカリ見て取れるではないか。実際、偶々ドアの外にいた5,6歳の女の子と目が合って困惑したこともある。

ところが、である。アメリカといえども、州によっては、ちゃんとドアが隙間無く閉まる州もある。オレゴンに入って、ハイウェイのサービスエリアに着いた時、トイレのドアがシッカリ閉まって、隙間が無いと判った途端、嬉しかったですね。オレゴン州が途端に好きになったりして。閑話休題。

ミシシッピに入るとウェルカム、と大書した看板があり、ウェルカム施設にようこそ、とある。丁度トイレに、と入ってみて驚いた。今までのどの州の施設よりも立派で、お屋敷みたいな建物の中で、コーヒーは出てくる、クッキーは出てくる、時間によってはダンスまで見せてくれる。これは州民のボランティアがやっているのだそうだ。私もコーヒーとクッキーをもらって、奥さん

風の人と話をした。私が「ミシシッピ・バーニング」と言うと、「今は違うのよ。今は人種差別の時代ではないの。」と、柔らかく諌められた。

そうか、アメリカは急激な速さで差別から遠のこうとしている。それが本物かどうかは歴史が証明するだろうけど、少なくとも差別を無くそうとしている人達が確実に増えている、と、このミシシッピの夫人は教えてくれた

今も盛んな
フォークダンス

ミシシッピからルイジアナに入る地域は海沿いで、石油コンビナート、倉庫、その間を縫う橋梁、交差ハイウェイ、と、水の上を走ることが多かった。昔フロリダのマイアミから、キー・ウェストまで、国道 1 号線を 4 時間かけて運転したことがあった。その国道が出来て、アメリカの南端が地続きになったし、第二次世界大戦時にはキー・ウェストに海軍の研究所も作っている。この国道は気持ちよく運転できる海上ハイウェイで、前を向いていても、海面が眼の下端に入ってくる。

ところが、ミシシッピの海面を走っていて仰天した。海面が下方ではなくて、眼の端と同じ高さにあるではないか。これはつまり、橋が海面スレスレにあるからではないか。これほど海の中を通る橋梁は今まで通ったことは無かった。早く向こう側に着かないか、と、ひたすら願うばかり。

ようやく向こう側について、I-10 をルイジアナに向かうと、午後 2 時頃、一点俄かに掻き曇り、真っ暗になったかと思うと、凄い勢いで水が空からタライをひっくり返したように落下してきた。スコールである。ハイウェイの車はどれもスピードを落とし、ヘッド・ライトを付ける。ゆっくり前進する。10 分ほどしたころ、今度は俄かに明るくなった。やれやれ、これが南国かよ。

ニューオリンズ

NY を発って一週間目に着いたニューオリンズでは、湾に面したフレンチ・クォーターのそばの Queens & Crescent Inn という古いホテルに泊まる。早速フレンチ・クォーターを歩いてみる。昔の名残か、フランス移民の末裔が住むという地域は、オカルト博物館もある怪奇観光のメッカとしても、独特の雰囲気のある所。そういえば吸血鬼作家アン・ライスの書く舞台もフレンチ・クォーターだったし。

Queens & Crescent Inn ロビー

湾側の古いレストランに入ってチリとジャンバラヤを食べる。

本当はガンボでザリガニがいいそうな。昼間の為ジャズの店は未だ開いていない。それでもラジオや CD から聞こえてくるのはジャズ。街全体がジャズに浸ったような感じだ。隣に座った人に、海を運転していた時、水が直ぐ側で怖かったと言ってみた。彼は、「オレはガキの頃からここに居るけど 40 年間、一回も水浸しになったことはないね。」と笑い飛ばされた。

この言葉が今、何と空しく思い出されることだろう。この後、10 日後にはこの街はハリケーン・カトリーナに酷い眼に合わされてしまったのだから。そう思うと、次の日、市内観光をした時、参加したツァーの名前が、「死者の街ニューオリンズ、郊外と墓地めぐり」だったことも、皮肉に思えてくる。「死者の街」という名称は南北戦争以来というのだが 150 年も経ってその名が当てはまるとは。

今はどうなっているやら。昔みた「欲望という名の電車」の舞台はフレンチ・クォーターだったが。

テキサス大平原

地図を見て、難所の一つと覚悟したのがヒューストンとエル・パソを結ぶ I-10 の一直線 850 マイル。一日 300 マイルをめどとして 2 日半。とはいえ、区切りのいいところが都市とは限らない。ここは只管走るだけで切り抜けようとサン・アントニオを越えたソネラという小さい街を中にはさんで、エル・パソまでまっしぐらに移動する。

途中のサービスエリアに降り立つとホントに何もない。これがアメリカの大平原か。ここで、何も無いところをカメラに収める。

カメラといえば、出発間際に友人が退職祝いにと贈って下さったのが、ニコンのデジタルカメラ。（この友人には旅のことを打ち明けていたので。）

私は大のカメラ音痴である。とはいえ折角のカメラ、この際持っていこう、と、カメラと説明書の類一式をそのまま車に乗せて出発した。

ミケルが出発の前日、取敢えず写すことだけは出来るようにとメモリーをセットしてくれたものの、全く自信が無い。出発して2，３日してから、着いたホテルでカタログを読む。記号とマークが一杯あって、よくわからないが、とにかく記録だ、と、それからは着いたホテルの部屋の額絵を撮り始めた。だからホテルの外で最初に撮ったのがこの何も無いテキサス大平原、ということになる。この一直線で通加したサン・アントニオが高層ビルの林立する近代都市になっているのには驚いた。エル・パソときたら、ホライゾン市の一部になり、大平原にいくらでも延びる工場地帯になっていた。サボテン、ソンブレロ、ギター、カウボーイはどこにいったのか。

この旅に出る時、友人から注意されたのは、砂漠でガス欠になったらコトだよ、ハイウェイの出口の間隔が長いからね、と。そこで、ガソリンは、気を付けて、半分以下になったら小まめに補給したが、実際には、このテキサスの直線距離では、ガソリン・スタンドは、50マイル以下で補給地があった。むしろ、アリゾナとカリフォルニアの間に横たわるモハヴ砂漠を越えた時は200マイル近くガソリン・スタンドを見ず、カリフォルニアに入ってやっと、スタンドの広告を見た時は心底ホッとしたものだ。

リオ・グランデとサンタ・フェ

例の宮沢りえさんがヌードになった写真集が大評判になったからという訳ではないが、サンタ・フェという言葉の響きと、異国風な文化を思わせる街の名に惹かれて行ってみた。エル・パソを北上し、ニュー・メキシコの中央あたりにある。ニュー・メキシコとその隣のアリゾナにはアメリカ・インディアンの保護地域が多く、（歴史的にみれば、現地人の土地に侵略したのが、白人・騎兵隊だから）そこにはインディアンの裁判所と生活区域があり、主として観光と賭博（カジノ）の収入で食べている。だから、保護地の岩山などは個人であってもカメラ撮影は申請して撮影料を保護地に支払う。それに岩山は霊廟でもあるのだから勝手に撮影するとカメラを取り上げられるとか。観光ツァー、代理店の場合は纏めて申請するのだそうだが、私はカメラは諦める。

サンタ・フェ旧市街は、スペイン人の統治とインディアン文化が混合されそれがアドビと呼ばれる土壁造りの建物となった。街の雰囲気はおおらかで土壁の茶色と緑の織り成す素朴な美しさに溢れている。土壁を仕切って、小間毎に売っているものも、スペイン調あり、インディアン調あり、そして衣類・宝石などは、両方が混在した異国情緒にあふれている。

翌日はサンタ・フェ周辺の山岳地帯をドライブする。あちこちにインディアンのプエブロ（集落）が散らばり、ヌードのりえさんが座った岩みたいなのもあちこちにある。壷や皿等の土器の焼物を観光客に実演して見せたり売ったりする店もある。中には素人眼にも芸術性の高い作品もある。そうした品は値段も結構して、5センチほどの壷で 1,000 ドル（11 万円）というのもあった。一桁違えばね、と、溜息をつく。

サンタ・フェの宿に帰る前に、西部劇というと映画の背景に何度も使われた、リオ・グランデ峡谷を臨むホワイト・ロック・オーバールック国立公園の崖の上に行ってみる。足元遥か下の方には、西部劇の映画では青々とした河のはずが、今は赤茶けた色の川が蛇がのたうつように延びている。ここにも柵が無い。ヘタに落ちたら死体も判らなくなるだろうと思わせる。

ところが、この高い崖っ淵に若いカップルが座って、足をブラブラさせながら、二人でジャレあっている。さすが度胸がいい。

崖っぷちに
座って。